

シューテム・アップ

2008(平成20)年4月25日鑑賞〈GAGA 試写室〉

★★★



監督・脚本=マイケル・デイヴィス/出演=クライヴ・オーウェン/モニカ・ベルッチ/ポール・ジアマッティ/ラモーナ・プリングル/グレッグ・ブライク/スティーブン・マクハッティ/ダニエル・ピロン/ジュリアン・リチングス (ムービーアイ配給/2007年アメリカ映画/86分)

第1章

アクションからコメディまで

……銃弾2万5千発のエクスタシー！「アメリカ版ジョン・ウー・アクション」を目指したこの映画のうたい文句がコレだ。エリザベス女王をも夢中にさせた男クライヴ・オーウェン(?)が、ワケあり、クセありの正義派主人公なら、ちょっと小太りの悪役ポール・ジアマッティも少しヘンなキャラ……。背景事情はややこしいが、それにはこだわらず無心にド派手な銃撃戦を楽しむのが本筋！ もっとも、銃規制の世論との兼ね合いは……？

うたい文句 その1——銃弾2万5千発のエクスタシー！

この映画のうたい文句の第1は、「銃弾2万5千発のエクスタシー！」。そして、これにプラスされるのが、「殺し文句は、弾丸(たま)んねー」というギャグ……？

英語力の不十分な人のためにあえて解説すれば、タイトルの『シューテム・アップ』とは英語の「Shoot'em Up」。辞書で調べると、これは「射ち合い、流血場面の多い映画(テレビ)」とあるから、その意味は……？

プレスシートによると、2万5千発の大銃撃戦は映画史上空前(当社比)らしい。すると、仕事では上司から、家庭では奥さんからガミガミ言われて気分が滅入っているあなたには、とにかく気分がスカッとする映画という意味で最適かも……？

うたい文句 その2——クール、スタイリッシュ&セクシー！

この映画の第2のうたい文句は、「クール、スタイリッシュ&セクシー！」。これは、この映画に登場する2人の美男美女の特徴をひとことで表現したもの。まず「クール、

スタイリッシュな主人公スミスを演ずるのは、私が2007年12月4日に観た『エリザベス：ゴールデン・エイジ』（07年）でエリザベス女王の心をも虜にしたほどワイルドな魅力をたっぷりとみせつけたクライヴ・オーウェン。『キング・アーサー』（04年）（『シネマルーム6』117頁参照）、『クローサー』（04年）（『シネマルーム7』144頁参照）、『シン・シティ』（05年）（『シネマルーム9』340頁参照）、『インサイド・マン』（06年）（『シネマルーム11』65頁参照）、『ピンク・パンサー』（06年）（『シネマルーム11』14頁参照）での彼の魅力的な演技は私も高く評価しているが、さてこの映画では……？

他方、「セクシー」な主人公は当然、娼婦役を演じた「イタリアの至宝」モニカ・ベルッチ。『マレーナ』（00年）で世界中から注目された彼女は、『ティアーズ・オブ・ザ・サン』（03年）（『シネマルーム3』249頁参照）や『パッション』（04年）（『シネマルーム4』261頁参照）のようなシリアスな役も十分こなせる女優。しかし、どうしてもその豊満で魅力的な肉体が先に注目されるため、『マトリックス リロードッド』（03年）（『シネマルーム3』118頁参照）や『セレブの種』（04年）（『シネマルーム12』101頁参照）のような役柄が多くなるのは少し残念。そして、その感想はこの映画でも同じ。とはいっても、銃撃戦中心のこの映画では彼女の見せどころは意外に少なく、スミスとつながった状態（？）でのスミスのマシンガン乱射が目新しいくらい……？

主人公は、実は3人！

「クール、スタイリッシュ&セクシー！」は美男美女の主人公2人しか表現していないが、プレスシートに「イイ奴、ワルい奴、美しい奴」という語呂合わせのような人物紹介があるように、実はこの映画の主人公は3人。

クライヴ・オーウェン演ずるスミスが「イイ奴」かどうかは少し異論があるが、「美しい奴」はもちろん娼婦役のモニカ・ベルッチ。しかして「ワルい奴」は、一見してあの『サイドウェイ』（04年）（『シネマルーム7』212頁参照）に出演していた俳優と気づいたポール・ジアマッティ演ずるハーツ。ポール・ジアマッティは『シンデレラマン』（05年）（『シネマルーム8』218頁参照）や『レディ・イン・ザ・ウォーター』（06年）（『シネマルーム12』72頁参照）でも、私にはお馴染みの俳優だ。

小太りの性格俳優（？）であるポール・ジアマッティは、悪役でも一風変わった悪

役が向いているようで、ハーツは元FBIのプロファイラーで人の考えや行動が読みとれるという特異能力を持った男。謎の男スミスが銃に関してすばらしい能力をもちながら、ニンジンをかじりネズミと一緒に住んでいるという少しヘンなキャラなら、ハーツも平気で人を殺しながらケタイでの愛妻との連絡を欠かさないと、悪党にはめずらしいヘンなキャラ……？

目指したのは、アメリカ版^{ジョン・ウー}吳宇森アクション！

中国人の^{ジョン・ウー}吳宇森監督がハリウッドで大成功を収めるきっかけになったのは、香港で記録的な大ヒットとなったハードボイルド映画『男たちの挽歌』（86年）、『ハード・ボイルド 新・男たちの挽歌』（92年）。その独特の映像美はハリウッドのアクション映画に大きな影響を与えるとともに、ハリウッドに進出した彼は、『フェイス/オフ』（97年）、『M:I-2』（00年）、『ウィンド・トーカーズ』（02年）などの作品を次々と生み出した。また、今年秋には日本でも100億円の製作費をかけた超大作『レッドクリフ』（08年）が公開される。

プレスシートによると、「この映画は、ジョン・ウー監督の『ハード・ボイルド 新・男たちの挽歌（92）』のワン・シーンにヒントを得て誕生した」とのこと。そして、『シューテム・アップ』の脚本を書き、監督したマイケル・デイヴィスは、この映画は「アメリカ版ジョン・ウー・アクション」だと表現している。『ハード・ボイルド 新・男たちの挽歌』を観た人は、赤ん坊を抱いた周潤發^{チョウ・ユンファ}が病院で一戦交えるシーンを覚えているはずだが、マイケル・デイヴィス監督は「そこからすばらしいイメージが沸き」、この映画冒頭のシーケンスをつくったとのこと。まずは、そんな冒頭のシーケンスに注目しよう。

話は結構ややこしいが……

ネット情報によると、マイケル・デイヴィス監督は「ハリウッドでも1、2を争うアクション映画オタクの俊英」らしい。したがって、スミスがくり広げるさまざまな銃撃戦では、面白く工夫されヒネリの効いたアクションが展開される。こんな映画では主人公が撃たれることは絶対にならないから、そんな小気味いいアクションを大いに楽しみたい。

ところで、なぜ悪党のハーツたちは妊婦（ラモーナ・プリングル）と、銃撃戦の最



© MMVII New Line Productions, Inc. All Rights Reserved.

中に産み落とされた赤ん坊オリバーを追い回しているの……？ そんなテーマになると、大量の精子と治療用の骨髄血が保管された奇怪な工房＝妊娠工場の存在や骨髄移植の適合性の問題など、話は結構ややこしいことに……。

一体誰が、何のために、そんな「妊娠工場」の中で、骨髄移植のための大量の赤ん坊を生み出しているの……？ スミスがそれを追及していくと、そこには何と銃の大手製造メーカー、ハマースン社のハマースン（スティーブン・マクハッティ）と次期大統領候補ラトリッジ上院議員（ダニエル・ピロン）の暗躍ぶりにたどりつくことに。さあこうなると、もともと「あっしにはかかわりのねえことでござんす」と言えなかったばかりに、ここまで深入りしてしまったスミスは、トコトンその黒幕たちとの勝負に挑まなければならないことに……。

ここまでに使われた弾丸が何千発か知らないが、後半からハイライトにかけて使われる弾丸の数はどんどん増えていき、最終的にその数は2万5千発！ ややこしい話はほどほどに、指をへし折られるというきつ～い拷問に耐えながら立ちあがるスミスの奮闘ぶりを楽しもう。

銃規制の世論との兼ね合いは……？

2008年4月5日に亡くなった俳優チャールトン・ヘストン氏が全米ライフル協会

の会長として銃規制に反対していたことはよく知られている。私は観ていないが、長編ドキュメンタリー映画『ボウリング・フォー・コロンバイン』（02年）では、マイケル・ムーア監督から絶好の標的にされたほどだ。このコロンバイン高校銃乱射事件は1999年4月20日に起きた有名な事件だが、2007年4月16日にはバージニア工科大学でも銃乱射事件が起き、コロンバイン高校以上の犠牲者を生むことになった。1980年代後半から始まったアメリカでの銃規制の世論は、こんな事件のたびに高まっている。

ところが、銃撃アクションを売りモノにしたこの映画は、あらゆる銃のオンパレード。また、銃の大手製造メーカー、ハマーソン社も悪役ながら存在感バッチリだから、銃の規制を訴える側からは、「こんな映画はナンセンス！」と批判されるのでは……？

そんな気持で資料をみていると、あったあった。2007年11月29日のニュースによると、「クライヴ・オーウェンの新作ポスターに批判の声」という記事が。つまり、「イギリスの広告基準協会（ASA）が、クライヴ・オーウェンの新作『シューテム・アップ』（原題）のポスターを暴力的であるとし、使用中止を命じた」とのこと。そんな銃規制の世論との兼ね合いをマイケル・デイヴィス監督はどのように……？

2008(平成20)年4月26日記